

家庭科教育の昭和史とともに——宮原小治郎小伝

第二部

『家事及裁縫』とともに (II)

佐々木 享

(名古屋大学教授)

『家政教育』誌の復刊

敗戦の翌年の一九四六年四月、『家政教育』が復刊された(二〇一)。紙不足のために裏表紙まで記事に使って全四頁だった。小治郎が書いたように、「戦争と浮浪人、犯罪と病氣、失業と生活難、生徒の欠食」という状況下での再発だった。一面焼野原となった東京に事務所を開設できなかったため、しばらくは下石神井にあった藤十郎の私宅を名目上の事務所とし、編集、発送の実務を信州の自宅で行った。長年の友人田中常憲は、雑誌の再出版に歌を寄せて、七七歳の主幹の不屈の精神をたたえた(二〇一)。

八十路近きをもて廃墟にふるい起つ君をおもへば涙し流る

田中常憲は、小治郎、田高女に勤めていたころ、同じ町にあった上田中学校の教師だった人で、それ以来詩歌を通しての無二の親友であった(二四一)。

なお『家政教育』誌の発行人が永田耕作となっていたのは二〇巻二号までで、三号からは宮原小治郎に復している。

共学制の出版

性による教育上の差別撤廃は、新学制の発足に先立ち、一九四六年十二月四日閣議決定の「女子教育刷新要綱」に基づいて進められ、翌年から、高校・専門学校・大学入学についての女子差別が撤廃された。また国民学校初等科三年以上に実施されてきた男女別学級制は、四六年十月九日の国民学校令施行規則中改正により廃止された。ただしこれによる国民学校の共学化進行の実態に関する研究は、管見の限り知られていない。四七年の新学制発足に当たっては、公立の小学校のほとんど全部、新制中学校の大部分が共学制で発したものとと思われる。

共学制に不安を抱く者も少なくなかった。例えば、龍山義亮は男女共学は幼稚園や小学校ではむしろ奨励すべきだが、「中等教育に於いては種々の条件を経て初めて之を實行すべきもの」と書いた。しかし、同じ号で新制中学校長花木チサオは、「男女共学に不安なし」と述べた(二一六)。実践家の方が進んでいたわけである。

新学制の発足

教育の分野では、戦前の教育が軍事主義の重要な支柱になっていたという厳しい反省の上に立って、大規模な改革が実施された。すなわち四七年三月三十一日には教育の目的は人格の完成にあるとした教育基本法が、四月一日には学校制度に関して学校教育法が公布・施行されて六・三・三・四の新学制が発足した。義務教育は九か年に延長された。

新制小学校は、国民学校初等科を移行させて出発した。小学校に続く学校は新制中学校として単一化され、三年制、男女共学・義務制とされた。出発の土台となる前身校を持たなかった新制中学校の創設には、多大の労苦があった。

中学校に続く学校としては三年制の高等学校制度が、その上には四年制の新制大学が創出された。中等学校と青年学校という差別的な分岐が廃棄され、同時に、中等学校以上では男女別になっていた学校体系が完全に統一され、男女共学を原則とすることとなった。

教育課程の編成基準は、小・中学校については『学習指導要領 一般編（試案） 昭和二十二年度』（一九四七年三月）により、高等学校については、四七年四月七日の発学一五六号「新制高等学校教育課程に関する件」により示された。従来の「裁縫」「家事」あるいは高女の「家政」は、「家庭」という新しい教科として抜本的に再編された。

新制家庭科の誕生

家庭科誕生の経緯は、今日ではかなり詳細に明らかにされている（朴木佳緒留「アメリカ側より見た家庭科の成立過程（1）（2）」『日本家庭科教育学会誌』三〇巻三―四号、一九八七、など）。これに対して、新学制発足時の家庭科教育の実態に関する研究はひどく後れている。この点で初期の実態につき豊富な情報を含んだ『家庭科教育』誌が復刻された（大空社刊）ので、今後の研究の進展が期待される。ここでは、戦後間もないころの雑誌から若干の話題を拾ってみよう。

家庭生活に関する新教科家庭科の誕生を『家政教育』が初めて伝えたのは、二一巻三号（四七年三月号）だった。そこで文部省某氏は小学校の家庭科は共学ではあるけれども、「男女ともすべて同じことをやるといっわけではありませぬ」と一部の教材が男女別になるだろうことを示唆していた。

発行直後の『学習指導要領 家庭科編』の概要、文部省の重松伊八郎の談話「家庭科の発足に当たって」も伝えられた（二一―五・六）。早くも十月号には、佐藤満佐子「家庭科学習指導の体験」のような先駆的な実践が報告された。

「家事」と「裁縫」は別教科という觀念に慣れてきた家庭科の教師たちが直面した問題の一つは、この教科を一人で受け持つことの是非とその可能性だった（二一―八）。

「家庭科教育」と改題

一九四八(昭和二十三)年二月号(二二一一)から、「家政教育」は「家庭科教育」と改題した。この改題は、雑誌が新時代に生きようという決意表明だった。雑誌の表紙には、しばらくの間「家事裁縫改題」という小文字が付されていた。「家政教育改題」でなかったところがおもしろい。

家庭科の共学

家庭科にとって最大の課題は、男女共学、あるいは男子にも家庭科を教えるという問題だった。

小学校の家庭科においては、学級編成が高学年に至るまで共学となったこともあって、全体としては共学実践が比較的順調に進んだごとくである。初期に見られた男児の抵抗も、急速に解消してゆく(「家庭科に対する子供の声をきく」二二一九、など)。調理実習などは共学でも(二二一五・六)、「学習指導要領」が裁縫など一部教材につき別学を指定していたために可能となった面もあるらしい(「男女共学の喜び」二二二三、など)。

中学校の家庭科は、農業、商業、工業、水産と並んだ職業科の一科目とされたため、その運用の実態は多様であった。中学校発足時には、男子には農業を、女子には家庭科を課していた、と四七年から大阪府下の農村の中学校長を勤めた青木一氏は筆者に語っている。

中学校家庭科の出発

女子には裁縫をしっかりとやらせたいという家庭科教師の思惑だけでなく、用紙不足のため家庭科教科書は女子の数しかないという事情(二二一二)も女子には家庭科をという状況に拍車をかけていた。

しかし、中学校においても、さまざまな形態で共学家庭科が出発した。東京の中学校では、共学で一時間、女子のみ二時間とか、共学一時間、女子のみ三時間でやっているなどと報じられた(二二一一)。共学家庭科は、教師に不安だっただけでなく、当初は男生徒の反応も複雑だった。「僕は家庭科は大嫌いだ」「家庭科なんていらないとばかりしていた」という子どもたちからも、授業が進む中で「男子も真剣に研究しなければならぬ」「お料理も女子と区別せずに実習して下さい」という声が上がって来る(二二一二)。

男女共学に比較的熱心だと見られた山形県における中学校家庭科の実践は、三号にわたって報じられている(二二一五・六・七)。別の雑誌で山形県の中学校長会は、県下の状況につき「男子に家庭科を課していない学校は三分の一」と報告している(「新しい中学校」一三三号、一九四九年十月)。男子に家庭科を課さない中学校が三分の一もあることを不満とする口吻である。しかし、山形県の状況が他府県でも一般的だったか否かは、今後の調査研究に待たねばならない。

別学で出発した新制高校

新制高等学校一八九〇年まで旧学制の高等学校が存続したので、当時こう呼ばれていた一は、一九四八(昭和二十三)年四月に、旧制の中等学校の生徒、教師、校舎・校地をそのまま継承して発足した。その結果、当初の新制高校は、旧中学校は男子高、旧高女は女子高、旧実業学校は職業高校という形で、校名は変わっても旧制中等学校の彩りを濃く残したままだった。

学習指導要領の上では選択教科とされた高等学校の家庭科は、右に述べた状況の下で、実際にはいわゆる女子校にだけ、ほとんどが学校必修として開設された。四八年秋から四九年にかけて実施された統廃合を経て多数の共学校が生まれ、と、家庭科の共学や、家庭科が制度上選択教科とされることが問題として浮上してきた。

家庭科の動揺

小学校の家庭科については、「家庭科は社会科の一環である」(二二一、二二八)とか、教科としての家庭科不要論が台頭してきた。中学校では職業科の一科目とされた家庭科を独立した教科とすべしという要求が根強かった。

この渦中で、国民学校令時代には裁縫の国定教科書の編纂に携わり、戦後は家庭科の創設を巡って苦勞した重松伊八郎が、四九年三月に文部省を退官した(二二一四)。

為藤十郎の退場と重松伊八郎編集長の登場

大戦末期から戦後初期の最も困難な時期に、小治郎の東京復帰まで名目的にせよ雑誌の発行所となり、また東京において編集に従事するなど、小治郎を助けて編集に携わっていたのは、為藤十郎だった。為藤は、『教育週報』編集の経験を持ち、仕事の堅実さには定評があったけれども、家庭科教育の専門家ではなかった。しかも新教育は、家庭科を「女子教科の中心」たらしめようという老齡の小治郎の思惑(二二一)をはるかに超えて展開していた。こうした折の一九四九年八月から、小治郎の委嘱により重松伊八郎が『家庭科教育』の編集長に就任した(二二一八)。

重松編集長登場まで小治郎と共に雑誌を支えた為藤十郎の生涯については、不明な点が多い。奇縁あって入手した清心幼稚園『五十周年記念誌』によると、為藤十郎は一九三八年に開園した石神井幼稚園の初代園長となっている。『教育週報』に勤めていた時期のことである。この幼稚園は大戦のため四四年四月から五四年三月まで休園しており、この休園期間に家政教育社に勤めたわけである。そして五四年四月に清心幼稚園として再開してからも、一九六〇年に亡くなるまで園長を務めた。この間に博物館協会やある出版社に勤めていたこともあるらしい。柔和な人と言われた十郎もまた、明治生まれのタフな面を内に秘めていたのかもしれない。